

# 授業マネジメントの勘どころ： 指導言の改善を求めて (1)

田邊 祐司 Tanabe Yuji  
(専修大学)

## 1 はじめに

今回は授業のリズムについて、3人の熟練教師の勘どころをまとめました。今回はリズムづくりにも深く関わる発問、指名、指示など、いわゆる「指導言」のポイントをいくつかピックアップ・アウトします。

## 2 段階性

教育学では明治の昔から発問研究が盛んです。とくに国語科教育では主に読解の側面からさまざまな研究があります。対して英語科教育では、語研などを中心とした取り組みはあるものの、発問は現場に出てから身につけるものといった考え方が支配的で、注目を集めはじめたのは最近のことです(田中・田中 2009)。そうした現状で、熟練教師たちはどのように臨んでいるのでしょうか。

A先生の発問に関する信念(belief)は、「易から難」と実に単純明快で、「教材によっては、むろん、意外性や惹きつけをねらうこともあります。生徒が答えられるものを最初に持ってきて、そこからビルドアップすることを原則にしています。」と述べています。

C先生も、発問は「『やり込める』ためのものではなく、あくまで生徒の“Can-Do”を尊重し、まずはYes / Noを引き出す発問、次に選択肢から選んで答えさせる発問、最後に内容に関わる精緻な発問といった認知的な段階を踏むようにデザインする」という立場です。さらにC先生は「趣味」をテーマにしたやりとりを例にあげ、「こういうケースでは、“What kind of music do you like?”などと始めてしまいがちです。しかし、その前に、“Do you like music?”など、生徒のYes / Noを引き出す発問をクッションとして発すると、より答えやすく

なります。そうすることで生徒から心理的な意味での圧迫感を軽減でき、授業のリズムも守れるはずですよ。」と述べています。

これは教育の本質を衝いた勘どころです。とくに英語の発問、Q&A活動などでは、実習生や新人教師は教え込もうとするあまり、5Ws1Hのような負荷がかかる質問から入りがちなどころがあります。ところが、この手の発問を最初に持ってくる、生徒は引いてしまうことが多く、授業全体のリズムに影響する場合があります。なお、発問に教育的な段階性を持たせるのは教授理論からも妥当とされています(ガレー 1965; 五十嵐 1981)。

## 3 「?→!」

段階性に加え、発問では3人に共通したポイントがもう一つありました。それが“Wow!”と生徒にうならせる仕掛けです。「(生徒を)落とす」という言い方をよくしますが、生徒から「なんだろう!、えっ! そうなのか!」という驚きや発見を引き出すタイプの発問を入れると、授業が活性化することを3人は経験から知っています。

B先生はその日の授業目標に一番結びつく発問には“Wow!”と言わせるようなものを仕掛けるようにしています。B先生があげたのは“Let’s ~.”構文を目標とした事例です：

「試合前に“Let’s go!”と先生が言います。でも、先生は試合に出るわけではないので、この表現はおかしくないか」という発問をします。そこからやりとりをした後に、「“Let’s ~.”には『~しましょう。』という意味だけでなく、場合によっては命令するのと同じ意味合いで用いられることがあるんだ」という「ゆさぶり」をかけます。

また、「?→!」タイプの発問を挿入することに関して、C先生も次のように述懐しています：

Initiation—Response—Follow-up (I-R-F) という談話構造で授業をみるという理論を学んだのは現職で入った大学院でのことです。現場に戻ってからは、発問や働きかけの Initiation にはそれまで以上に気を配るようになりました。発問のデザインでは気づきや発見が生まれるような切り口を用意します。そうすると学習項目が彼らの中により残りやすくなると実感しています。

このように、3人とも「発問」を「気づき、発見」を喚起する手段としてとらえていることがよくわかります。

## 4 指名

発問と切っても切れないのが指名という技術です。ご存知のように、欧米諸国では生徒が発言するのは当たり前が多く、あえて教師側から働きかける必要はほとんどありません。とはいえ日本ではこうした働きかけが不可避なのが現実でしょう。3人はこの領域においても、一定の勤どころを設けています。

B先生の場合、発問を個人指名から始めることはないそうです。指名ではいきなり個人を当てることはなく、まずクラス全体に発問を投げかけ、一呼吸置いた後に個人指名に入るということを基本にしているとのこと。A先生もまた、「崖っぷちに追い込まない指名を心がけています。つまり、学習者の特性を踏まえた指名を行うことも大切にしています。もちろん、pick-off（抜き打ち）として、集中力が途切れそうな生徒を狙うこともあります。基本は生徒から発せられるコミュニケーション・シグナルを見て、指名をしています。」とのこと。

熟練教師は、指名という、一見、単純な技術に対してもぬかりなく臨んでいるのです。

## 5 指示

生徒に行動を起こさせる指導言が指示です。これも簡単なように思えますが、マネージメント上、意外と落とし穴になることがあります。3人とも、大切なのは、何のために、なぜこの活動をするのかと

いうことが、生徒としっかり共有されているかどうかキポイントだと見えています。

A先生は、「何のために音読をするのか、ペアでやる活動にはどのような意義があるのかを自分の経験談などを交えて、学年の早い段階で伝えます。こうした目的の共有があると多言は要しません。」と早い段階からの意義付けを強調しています。

また、B先生は、実習生に対して「KISS (Keep it simple, stupid.)」ということを中心に心がけています。これは、指示は結論から伝え、指示の先にある活動内容を複雑にしないという意味です：

毎年のごとく実習生を預かりますが、最近是指示が不得手な実習生が多くなっていると感じています。声は大きく、元気いっぱいなのですが、何をやらせたいのか、「言語過多意味不明」なことが多く困っています。さらに、活動にもいろいろな要素を盛り込みがちで、生徒が混乱する場合があります。そういう実習生には音楽や技術・家庭の授業での指示を見てきなさいとアドバイスをします。それらは作業指示が多い科目なので複雑な指示はあまりありません。

「指示」という、一見、単純な指導言にも、意義の徹底と指示内容の簡潔性という勤どころがあり、そこを押さえるかどうか授業の成否にも関わることを再認識しました。

## 6 おわりに

私自身、大学の教職課程で理論・実践両面からこうした指導言を学んだ記憶はなく、実習に出て初めてその重要性を実感した覚えがあります。しかしながら現場で真っ先にぶつかるのは、こうした指導技術への意識の置き方に起因する「マネージメント不全」かもしれませんね。生徒の側に立った指導言を心がけたいものです。

### 【参考文献】

- 五十嵐二郎 (1981). 『英語授業過程の改善』大修館書店.
- Percival Gurrey 著 / 鈴木保太郎・五十嵐二郎 訳 (1965). 『英語教授法』御茶の水書房.
- 財団法人語学教育研究所 (1988). 『英語指導技術再検討』大修館書店.
- 田中武夫・田中知聡 (2009). 『英語教師のための発問テクニック』大修館書店.
- 田邊祐司 (1987). 「授業分析法の意義と限界—Sinclairの手法を用いて—」『中国地区英語教育学会研究紀要』No. 17, 63-73